読売 俳壇

高野ムツオ 選

野焼後の雨と空襲後の雨と　高槻市　村松　譲

【評】焼野原は本来は野焼後の野原のこと。戦後、空襲で焼け出された街を指すようになった。野焼後の雨は芽吹きをもたらし、空襲後の雨は悲しみをもたらした。

骨冷めて壺の軽さや夕桜　長崎市　鶯　直巳

【評】火葬直後の骨壺には熱いがゆえの悲しみの重さがあった。冷えてから抱くと軽かった。しかし、軽いがゆえの悲しみもまた深かった。

ふくらし粉少し足す雲春近し　北見市　藤沢　直美

【評】蒸饅頭みたいに盛り上がった雲、いやホットケーキのように平べったい雲かもしれない。春呼ぶ神様が乗って操縦している。

水ぬるむ浅瀬の波のはやきこと　山梨県　一瀬　利彦

正解は一つではなしいぬふぐり　葛城市　山本　啓

親知らず抜きたるやうな余寒かな　東村山市　副島　健

歳取るは生きてゐるゆゑ山笑ふ　静岡市　山本　正幸

シベリアの父も見上げし春の星　東広島市　児山　順子

忘れ雪デブリ其のまま十五年　上尾市　松本　光弘

川の合ふ音の確かさ山笑ふ　東京都　小松　貴志

正木ゆう子 選

ままごとも共働きや立子の忌　狭山市　小俣　友里

【評】星野立子の「ままごとの飯もおさいも土筆かな」に唱和するような句だ。立子忌は三月三日。女の子の節句であることも、二つの句の時代的な変化を際立たせている。

ものごころつくまへのひなまつりかな　大阪市　大塚　俊雄

【評】記憶に残るのは何歳位からだろう。最も親に慈しまれた幼い頃のことは、忘れてしまう子供。それを客観的に眺めている視線である。母も姉も来ていたような雛の間　神戸市　音羽　和俊

【評】お雛様は昔のままなのに、母と姉はもう居ない。「来ているような」ではなく「来ていたような」の過去形がいい。気配の名残なのだ。故郷の姉が蜜吸ふ花椿　和泉市　山崎　文恵

クレソンを鼻へ押し当て母恋し　東京都　岩本　遥

扇状地の光を集め春の水　秋田市　進藤　利文

街路樹に手の窪ほどの小鳥の巣　浜松市　木通　佳子

漆黒の幹あってこそ初桜　福生市　二瓶　利明

自転車に乗れた公園風光る　大阪市　高橋　志緒

木の芽風いつしか小雨降り出しぬ　大竹市　二階堂顕二

小澤　實 選

リヤカーに焼死体三月十日朝　東京都　斎木百合子

【評】昭和二十年三月十日未明、東京大空襲があった。米軍爆撃機の焼夷弾による住宅密集地への無差別爆撃である。リヤカーに載せられた焼死体をたしかに目撃している。

蛍烏賊の目ん玉プッと出しにけり　東京都　川瀬　佳穂

【評】口の中に残ってしまった蛍烏賊の目玉を吹き出す。たしかにそんなことも含めての味わいである。こんなことも句になるのか。

立春の土偶今にもしやべりさう　泉佐野市　布野　寿

【評】縄文人にとって、冬は厳しい季節だった。だからこそ、立春はうれしい日であった。土偶の表情に縄文人の思いを読み取る。

ぎゆつと鳴く雪を両手で詰めをれば　河内長野市　滝尻　芳博

体育館全方位から隙間風　土浦市　今泉　準一

葬列の避けて行きけり薄氷　出雲市　石原　清司

蓮如忌や子らも諳んじ正信偈　東京都　朝田　黒冬

初花や西郷さんの像仰ぐ　牛久市　中村　栄子

のれそれは白魚よりも透きとほる　町田市　枝沢　聖文

落し角拾ひし二本目は奇形　広島市　大林　実

津川絵理子 選

救急車来て真夜中の花照らす　芦屋市　田中　俊

【評】近所だろうか、救急車が来て止まった。救急車の灯りが照らすのは、真夜中の桜の花。救急の緊迫感と美しい桜の取り合わせが、一種異様な雰囲気を醸し出す。

菜の花もアヒージョとなる夕べかな　朝倉市　深町　明

【評】この頃は野菜売場でも売られている菜の花。アヒージョに入れても美味しそうだ。スペイン料理の陽気さが、明るい菜の花に合う。

宅配人梅をほめつつサインさす　八幡市　会田重太郎

【評】家の梅の花をほめながらもサインを促す、宅配人のてきぱきとした仕事ぶりが目に浮かぶ。梅をほめるところが人柄を感じさせる。

AIとルームシェアする老の春　東京都　石井　秀一

水面から河馬が目を出す梅の花　松山市　夕月　秋人

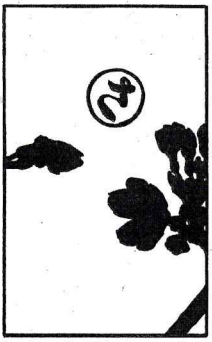
日の溜まる木の椅子二つ花ミモザ　川越市　大野宥之介

コーヒーのケトルに映るシクラメン　枚方市　秋岡　実

春祭傀儡の母に傀儡の子　大阪市　今井　文雄

ごみ出しの下駄の鼻緒の冴返る　宇都宮市　津布久　勇

下萌の声持ち帰る靴の底　神奈川県　中村　昌男



題字デザイン・イラスト　福田美蘭

短歌あれこれ　久永草太（歌人）

聖地巡礼・平和園

旅先で、本やテレビや楽曲に登場した場所を訪ねるのが好きだ。東京なら、NHK「ブラタモリ」に登場した八重洲地下街のカフェを特定して訪ねたり、東京事変の歌詞に登場する溜池山王駅に降りて、何にもないなあと思ってみたり。想像と一緒なら嬉しいし、違ったら違ったで、想像力の限界を感じられて面白い。最近は「聖地巡礼」と呼ばれているらしい。

名古屋に「平和園」という中華料理店がある。店主・小坂井大輔さんの『平和園に帰ろうよ』という歌集のファンで、ずっと行きたかったその店へ、先月ついに突撃してきた。〈食べてから帰れと置き手紙、横に、炒飯、黄金色の炒飯〉の炒飯がテーブルに運ばれてくる。確かに黄金色だ。ではお口で訪ねる聖地巡礼ということで、いただきます。噛むほどに口が聖地で満たされる。ああ、想像と違う。想像を超えて、口から頭の中まで、ぜんぶ黄金色に……。